

<Part 1 修正部分>

p. 106 の最初の段落

亀岡に関わる伝承で最も人気なのは「丹の海」の開拓であろう。次の田中（1941）『丹波の傳承』（亀岡の治水: pp. 81-82）では出雲系の伝承が重視されている。

注記： 次の、「この伝承」ではじまる文は削除する。

p. 106 の「引用～亀岡の治水」と、この直後の「筆者の母校」で始まる段落の間に挿入

この引用では出雲系の歙山神社の伝承が採用され、大國主命が主人公になっている。本論の「I.3 大山咋命と大國主命の上下関係」と「VI.5 秦氏（大山咋命）による丹の海開削時期」で論じるように、秦氏（大山咋命）が開削の主体であった。先住の出雲族はそれに協力したのであろうが出雲系の社傳では大國主命が主体となっている。

p. 110 の「引用～上田の図表の説明」直前の行

上田は図表（本報告の図 2）の示す意義を端的にまとめており、その文すべてを次に示す。

p. 112 の「国立国会図書館デジタルコレクション」で始まる第 2 段落の末尾に追加。

井上（1995）は、これをそのまま踏襲している。

p. 112 の下から五行目の「安町は謝り」に新たに注記追加

『亀岡神社誌』『伊達神社』には「現在は安町加塚の里人が氏神として尊崇し、皆で七月の例祭を祝う。」とある。「伊達神社」は加塚遺跡内にあって近代的行政区分によって生活圏が分断されているのである。しかし表 1 の「所在」は現行政区分名が相当する。

p. 113 の「II 桑田郡式内社一覧」の直前に、次の新たな節 I.3 を追加。

I.3 大山咋命と大国主命の上下関係

『亀岡神社誌』『桑田神社』（pp. 210-211）の内容は、前掲の『神祇志料』と趣が異なる。

—— 引用～『亀岡神社誌』桑田神社

大山咋命は大国主を従えてこの地に来られ、土民を督励し、相協力して岩を穿ち、石を割り、土を盛って、山本浮田の峽を切り拓き、山城葛野へ水を流し陸田に干拓し、後、大山咋命は鋤を取り、大国主命は鋤を取って、土地の住民とともに農耕に励んだ。当時、この地を田庭と呼ばれていたそうで、丹波はこの田庭より名付けられたと思われる。

引用～おわり ——

この引用では大山咋命は大国主命より上位にある。祭神が大山咋命であり、桑田神社が松尾系に属することに対応している。『神祇志料』をまとめた栗田寛は東京帝国大学教授で近代的歴史学の確立に寄与したが、水戸学的尊王精神を

持ち、皇室を中心とした国体を歴史的に証明しようという思いがあり、それが大山咋命を大国主命の上位に置く社傳に対し、「大山咋神は所謂^{いむゆる}、お供八神の一也」と上から目線で注記したと筆者は考えていたが、『神祇志料』だけでなく、愛宕神社縁起にも同様の記述があった。ただし、維新後に書き換えられた可能性も残る。

前掲の「引用～上田の図表の説明」にあるように、篠村、大堰川沿いの松尾系信仰圏の分布は、秦氏の祭神大山咋命が丹の海干拓の主役に当たることを強く支持するのである。

p. 114 = 表 2, の一部を変更しました。

表 2 は上下に分けています。上の「所在」では、例えば、旧亀岡余部町とありますが、正確には、旧亀岡町余部村です。しかしこの表現は現在の「所在」を表すのには不適切です。それで亀岡市制の発足による村から町への呼称変更とかつての亀岡町内にあったことを併せ示す形として、亀岡余部町という表現が妥当と考えました。『亀岡神社誌』では所在表現に統一性がなく現在の亀岡市行政区名に統一した。

表 2 の下の「系列」のところで、「10 阿多古神」について、「皇室」から「修験」に変更した。この根拠は、新項「II.2.c 阿多古（愛宕）神社の神系は山岳信仰」のところで記述している。

p. 117 の II.2.a の第 2 段落以降を次の文と差し替えます。共通部分もあるが煩瑣なので一括で次の文に差し替えます。

亀岡市史編さん委員会編（1995）『新修亀岡市史』本文編第一巻の第五章第四

節「寺社の文化」（井上満郎担当）の「表 17 桑田郡式内社一覧表」（本報告の表 1）では、蕨田野神社について、祭神をウケモチ・オオヤマヅミ・ノヅチとし、系列を松尾系としており、その出典を「上田正昭『古代村落の成立』、『篠村史』所収」としている。しかし、前述のように上田は根拠を示していないが、出雲神系としている（図 2）。

この 9 月末の日曜日、蕨田野神社に出かけた。隣接する大石酒造社長大石博司さんとご一緒して、氏が設置に貢献された稗田阿礼の祠に向かうところで、観光バス立ち寄りスポット大石酒造に絡む観光客が神社の境内に入ったのを大石さんは見かけて、持ち前のサービス精神を発揮し、八幡宮裏に隠れたお宮方面を指して、この奥に伊勢外宮と同じ神さんがお祭りされていますよー、と伝えていた。観光客は見えないこともあって、関心を示さなかった。

大石さんは氏子代表クラスの高齢の方であるが、三神の代表格を保食命と受け取っているのである。三神の並びがそのまま蕨田野神社の祭神の上塗りを反映しているように思われた。

下中編（1981）『京都府の地名』には「蕨田野神社」（p. 369）の社伝が次のように示されている。執筆陣に上田正昭はいない¹。

—— 引用～蕨田野神社

古代、集落の中心に森を残し、土盛を作り食物や野山の神の霊を祀ったのを発祥とし、和銅二年（七〇九）に丹波国司大神朝臣粕麻呂が土盛の前に社殿を建てたのに始まるという。

引用～おわり ——

この引用については常識的な文脈ゆえに後に再構成されたものと受け取れ

¹ 亀岡市担当者は遠山泰之（亀岡高校教諭）と永光尚（口丹波史談会代表）である。前者は筆者の高校三年時に日本史を教わった恩師であり、後者は友人によれば同級生の父ということであった。筆者は幼くて日本史に興味がなくなぜか遠山先生には授業中よく揶揄われた。

る。「野山の神の霊」は容易に野椎命^{のづちのみこと}と大山祇命^{おほやまつみのみこと}に対応しうる。つまりは、

地主神^{ぢぬし}が『古事記』に登場する夫婦神の野椎命や大山祇命の神名へと比定されたとみるのが自然であろう。

pp. 118-120 のⅡ.2.b の第 4～6 段落の阿多古神社の部分を膨らませて、新たに新項「Ⅱ.2.c 阿多古（愛宕）神社の神系は山岳信仰」を追加します。

Ⅱ.2.c 阿多古（愛宕）神社の神系は山岳信仰

千歳町国分の阿多古（愛宕）神社の神系について論じる。前述のように、上田は記載漏れしたのであるが、「図 14 式内社の分布」(本報告の図 2)では「○」、つまり「その他」とある。井上が断じた皇室系でも出雲系でもない。祭神は、記紀や風土記に出てくるような後々の神々「火産霊神、伊邪那美神、大国主神」ではないのである。紀元 6 世紀よりも遥かに古い祭祀や信仰形態が受け継がれて来たものと思われる。上田が「その他」としてどういった神系を考えていたかはわからない。

Ⅱ.2.a で示したように、筆者は、「地の守護神^ちの最初の上塗りこそ、神系列になる」、と考えており、自然神を神系列にすることはできない。政教勢力に関わるはずの系列を選択しなければならない。『亀岡神社誌』『愛宕神社』（pp. 174-176）では、「遠く神代に始まり、山を神籬^{ひもろぎしやうきやう}聲境として祭祀したと伝えられる。人皇二十六代継体天皇即位元（507）年に初めて神殿が建立され」云々。幾つか

の天皇との関係が示されている。「大宝年間（701～704）、役ノ小角^{えん おづぬ}が（補記：

加賀白山^{はくさん}を開山した）僧泰澄^{たいちょう}とともに険しい手白山^{てしやうやま}（補記：のちに愛宕山と改

称される）の山頂を拓き、天応元（781）年和氣清麿^{そうぞう}藤井慶俊僧都が奉行となっ

て社殿を造営、和氣清麿^{こうきにん}は光仁天皇に請願して前記当社の分霊を鷹峰から山上に遷し祀り阿多古神社と呼んだ」などとある。この記述では愛宕権現のような仏教的要素が捨象されてはいる。とはいえ、皇室神系ということにはなるだろう。

前述のように『南桑田郡誌』には初代国司によって指名された四社のなかには愛宕神社はない。何らかのヒントが得られないかと愛宕神社現宮司井上賢宏^{まさひろ}氏と先日（2026年6月14日）に境内でお会いした。社傳も一部拝読させていただいた。井上氏の父方（西田利弘^{としひろ}）の祖父（西田松次^{まつじ}）はこの愛宕神社と宮川神社の宮司であった。宮川神社（旧称神野神社）は前述のように賀茂神系（図2）である。

愛宕神社に現存する本殿は、文化庁（運営：国立情報学研究所（NII））の文化遺産データベースによれば、「比較的大規模な一間社流造^{いちけんしゃながれづくり}で、木割が太く、手法は簡潔で、力強い。庇廻りは大正年間に一新されているが、当初材がほとんど一式別途保存されている。鎌倉時代に溯る貴重な遺構。」とされ、昭和五十二（1977）年一月二十八日文部大臣（海部俊樹）より重要文化財の指定」を受けている。

この拝礼軸として牛松山山頂にあたる東北東方向を筆者は想定していたが、

意外にもほぼ真北であった。この付近の現在の磁北偏角²は西偏 8 度ほどである
が高い精度のコンパス SUUNTO で計測するとほぼ真北（西偏 2 度）を示してい
る。ちなみに現在の愛宕山総本宮の軸線は北北西を示す。^{しらやまひめ}白山比咩神社³（加賀
国一ノ宮、石川県白山市三宮町ニ 1057）を見ると、拝礼軸は正しく白山山頂に
向かって山岳信仰が具現化されている。

山岳修験信仰の形として拝礼軸が正しく残存しているのは白山信仰である。
愛宕山総本山と千歳町国分の愛宕神社の拝礼軸はほぼ真北方向であって大陸
文化の北斗信仰と結びつくのだろう。山岳信仰の拝礼軸が愛宕神社では失われ
ている。それだけ皇室系の影響下にあったとも考えられる。

修験者「役ノ小角と泰澄」が関わった愛宕信仰は元愛宕（千歳町国分）＝ 愛
宕神社とともに、山岳（修験）信仰の変容と現世利益的な庶民信仰（火伏せ・
水利等）としての定着という観点で捉えることができ、上田正昭が「その他」
としたのはこういう観点ではなかったかと思われるのである。表 2 の「系列」
として「その他」に含めるべく「修験」とした。

井上の表 17（本報告の表 1）では祭神は、『亀岡神社誌』同様「火産霊神、
伊邪那美神、大国主神」となっているが、火の神＝阿多古神が、古事記の
^{ひのかぐつちのかみ}火之迦具土神、日本書紀の^{かぐつちのかみ}軻遇突智神につながり、阿多古神社周辺の出雲系の
神をも取り込まれたことがみえるのである。

² 国土地理院の電子国土 WEB

³ 養老元（717）年、泰澄は初めて白山に登拝し翌年山頂の奥宮に白山比咩
大神（菊理媛尊）を祀る。

p. 126 の第 2 段落 (G.E.Pro, で始まる) の二行目

筆者 (木庭, 2025b) の実測では, 平面直角座標値 (N, E) の精度は.....

p. 126 の第 3 段落 (表 3, で始まる) の四行目

近の高度は人工的な改変もあり海拔 106m ほどであるが

p. 130 の V.1 のタイトル

V.1 低位段丘の離水と式内社などの進出

p. 131 の最終段落の一行目

海拔高度表示の精度は水平位置よりも多少粗いが, Google Earth Pro の機能を使って,

p. 132 の第一段落内に新たな段落を挿入

.....想定したのである。

本節の観点を言い換えると, 低位段丘Ⅲ面は丹の海の湖底面であって, 大山咋命によって山本浮田の峡が切り拓かれて後, 海拔 112~100m の小幡神社以下八社が進出したと考えたのである。

なお, この観点は後述のように遺跡分布図を調べることで再考を迫られる。

p. 133 の最初の行

市域の発掘資料の情報は市史出版後、かなり更新されていて

pp. 135-136 の V. 3 中川（2009）による案察使遺跡での「低位段丘」、のおわりの3段落を除いて、段丘面や段丘崖などの地形学用語に「」を追加

中川（2005, 2009）は、牛松山山麓西方の氾濫原にある K41^{あざち}案察使遺跡のトレンチ調査から「水中堆積物」中に鬱陵隠岐火山灰（10,700 年前）を検出している。そのトレンチに近接しているとする「段丘崖の形成は1万年以前となり、段丘は低位段丘であることが明らかになった。」（中川, 2009: p.8）とする。

現在の河川の氾濫原のそばの崖は現在の河川の侵蝕で生成されたものなので、この観点は誤りと感じるが、氾濫原そばに見える「段丘面」と氾濫原を限る崖が旧氾濫原が段丘化された結果とする場合は問題ない。ただ、「段丘崖の形成は1万年以前」という場合、その「段丘崖」は現在進行中のものであり、やっぱりおかしい。

「左岸域にはいわゆる氾濫原といわれる地域と比高差最大 5m に及ぶ段丘崖をもつ平坦面があり、現在は水田が広がっている。『新修亀岡市史』（2002）では、低位段丘面として位置づけられている。」（中川, 2009:p.7）と言う。参考文献欄を見ると、亀岡市史編さん委員会編（2002）『新修亀岡市史本文編』第一巻、とある。これは 1995 年に出版されている。この「第一章 亀岡の自然環境」（井上, 1995）などを確認したが地形分類図などは提示されていない。中川は「氾濫原上でのトレンチではあるが近接する「段丘崖」を介した「段丘面」は低位段丘に当たるとしたいのであろうか、筆者には理解できないのである。

メモ： 中川の用語使用に混乱があり、中川の表現を「」を使って記述したのであるが、読み

返してみて、著者が理解できず、新たに「」を追加することになった。

p. 136 の V.3 の最終行

掘資料情報を使ってキーサーフェスの観点から地形分類図を提示したい。

p. 146 の注 2)の修正

父木庭次守は蔦田野町に隣接する本梅町で昭和 49 (1974) 年 10 月 18 日に、
(日本) タニハ文化研究所を立ち上げた。その際の協力者には、日本博物館協会初代会長徳川宗敬、京都大学名誉教授上田正昭などがいる。(京都新聞丹波版
昭和 49 年 10 月 19 日号「丹波の総合史 30 年計画で編集」)

(以上)